

論文・レポートの 文章作法

古郡廷治 著





有斐閣新書

論文・レポートの文章作法

郡廷治 著

著者紹介

古郡 廷治 (ふるごおり ていじ)

1974年ニューヨーク州立大学 (バッファロ) 大学院博士課程 (計算機科学) 修了, Ph. D. クリーブランド州立大学助教授を経て, 現在, 電気通信大学情報工学科教授。

著書 『文字列処理のための計算機科学概論』 (総研出版, 1985)

『アメリカを読む』 (共著, 筑摩書房, 1986)

『日本のイメージ』 (筑摩書房, 1986)

『生命の危機を読む』 (筑摩書房, 1988)

『PASCAL 入門』 (サイエンス社, 1989)

『プログラマのうちあけ話』 (共訳, 近代科学社, 1991)
など



有斐閣新書

論文・レポートの文章作法

1992年6月30日 初版第1刷発行©

1994年7月30日 初版第4刷発行

著 者 古 郡 廷 治

発 行 者 江 草 忠 敬

発行所 株式会社 有 斐 閣

〒101 東京都千代田区神田神保町2-17

電話 (03) 3264-1315 [編集]

(03) 3265-6811 [営業]

京都支店 [606] 左京区田中門前町 44

落丁・乱丁本はお取替えいたします

(株)理想社・稲村製本

★定価はカバーに表示してあります

ISBN 4-641-09131-5

図本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは, 著作権法上での例外を除き, 禁じられています。本書からの複写を希望される場合は, 日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

まえがき

文章を書くのが苦手だという人がたくさんいます。私もその一人ですが、そのことはさておき、論文やレポートを見る側に立ってみると、内容もさることながら、文の構造や文章の形式に意を払わない人の多いことに驚かされます。

考えてみれば、これは当然のことなのかも知れません。私たちは、小中学生のときに作文を書かされて以来、書くことについては何の訓練も受けてこなかったはずです。いつてみれば、そのつけが実際に自分の文章を書く段になって出てきてしまっているということなのでしょう。

文章を書くための参考書には、小説家による『文章読本』があります。文章の専門家の手になる『文書読本』は「うまい」文章、文学的な文章（名文）を対象にしています。

文章作法の本には、多くの書名のもとに、文章研究家やジャーナリストの書いたものがあります。こちらは、大抵、商用文か、くだけた日常性のある文章を書くことを目的にしています。

文章作法の本には、『論文の書き方』に代表される書名をもって、学者や研究者の書いたものがあります。これは、「よい」文章（論文やレポート）を書くためのものですが、人文・社会科学系の文章作法の本では、文章を書く上での周辺状況（テーマの見つけ方、ノートのとり方、資料の整理、など）を問題にしているものが多いように見受けられます。理工系の文章作法の本では、文章そのものより、形式（全体の構成、図表の描き方、参考文献、注のつけ方、など）を中心にしたものが多いかと思えます。

よく、しっかりした思想（書くこと）があれば文章はできたも同じだといわれます。たしかに思想と文章は切っても切れない関係をもっています。しかし、書きたいことがあっても、全体をまとめ、内容を効果的に伝えるには言語の表現技術も必要です。どうすれば、「よい」文章が書けるのでしょうか。論文やレポートに使った文章は適切なものだったでしょうか。

本書、『論文・レポートの文章作法』では、私が先輩や同僚から教わり、文章を書くときに注意したいと思っている事項に焦点を当ててみました。もう少し具体的にいうと、本書は、文科とか理科とかを問わず、学術論文、小論、報告書、マニュアルなどに、どんな構造や語句を使った「文」や「段落」を書くべきかについて私見を述べてみたものです。

本書の構成と内容は次の通りです。本書は五章からなっています。第1章では、文章のよしあしについて触れます。ここでは、「うまい」文章、「よい」文章を例示した後で、文章のもつべき構造を読み手側に立って考察し、論文やレポート（論理と思考を表現する文章）の属性を考えています。第2章では「文」の書き方、第3章では「段落」の書き方を考えます。これらの章では、単語の集まりからなる文と、文の集まりからなる段落の構造について述べ、例文を通し、文や段落を書くのに必要な諸原則を提示しています。第4章では、段落の集まりがある構造をもつてつくる「文章」の書き方を考えます。ここでは、文章の形式について触れ、文章の設計と執筆に関する諸原則を述べています。最後の第5章は、やや付録的な事項を扱った章です。ここでは、文章を文字にするときに問題となる句読点および漢字の使用原則と、カタカナ（外国語）の使用原則を述べています。

本書を書くに当たっては多くの人にお世話になりました。ここでは、とくに畏友、足立英之氏（神戸大学・経済学）、野下浩平氏（電気通信大学・情報工学）、井上治行氏（同上・法学）に感謝したいと思います。本書には、普段の会話の中で、私がこれらの諸兄から直接、間接に学んだこともたくさん入っています。

この小冊子には有斐閣の石塚務氏が編んでくれました。思いつくままに書き留めた原稿がこ

論文・レポートの文章作法 目次

まえがき

第1章 文章のよしあし

1 味の文章と論理の文章 ————— 4

「うまい」文章／「よい」文章

2 文章の枠組み ————— 12

文法および意味の整合性／三面記事の枠組み／論理の文章の枠組み

3 文章と文体 ————— 24

文学の文体／論文の文体

第2章 文を書く技術 ————— 39

1 文の構造 ————— 40

日本語の特徴／単文・重文・複文／肯定文と否定文

2

文と文章

48

軽い文章／論文の文章

3

文の基本原則

53

構造の完全な文を書く／肯定、能動態の文を書く／一文一アイデアの文を書く

4

文の補則

67

簡潔な文／無駄のある文／釣合のとれた文／主部と述部の一致／主語の位置／修飾語と関連語句の位置／難解な語句や造語／意味の限定の不十分な語句／感情を表す語句や俗語／価値判断を内在する語句

第3章

段落を書く技術

89

1

段落の構造

90

段落内の文の結束／主題の展開／主題と段落

2

段落と文章

101

論理展開のよい段落／論理展開の悪い段落

3 段落の基本原則

107

主題の明確な段落を書く／一段落一主題の段落を書く／結束性のある段落を書く

4 段落の補則

116

構造の完全な段落／段落の変更／段落の長さ／接続語句の濫用／照応詞の濫用／わき道を含む段落／段落の速度／事実と評価

第4章 文章の作法

145

1 文章の構造

147

実用文の形式／本の形式／論文の形式

2 論文の設計

154

文章の質／構想と筋書き／論文の内容／論文の構成例

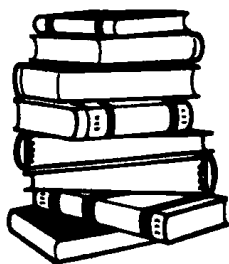
3 文章の原則

175

書く前の原則／書くときの原則／書いた後の原則

参考文献	225
あとがき	223
第5章 表記の方法	191
1 句読点の使用原則	193
2 漢字の使用原則	205
3 外国語の使用原則	212

第1章 文章のよしあし



文章を書く——これにはだれもがたいへん苦勞するものです。日頃、自分で少しは文章を書き、仕事の一端として、学生の文章を見せてもらったりしていると、書くことのむずかしさを痛感します。

一体、どういう文章を「うまい」文章というのでしょうか。「よい」文章とはどういうものでしょうか。小説や随筆の文章と論文やレポートの文章とでは、どこが同じで、どこが違うのでしょうか。どうすれば、目的に合った文章、きちっとした文章が書けるのでしょうか。文章には、これだという書き方、作法があるものでしょうか。

どんなことでも、知的な作業には何らかの訓練が必要です。車を運転したい人は教習所にいった訓練を受けます。碁や将棋のようなゲームでは、大抵の人は、それをよく知っている人からの指導のもとに打ち方を覚え、腕を上げていくでしょう。コンピュータのプログラムが書きたければ、専門書を独学したり、企業の講習を受けたり、専門学校や大学での講義をとったりします。

文章を書くことは、人間の行う作業の中でもっとも知的なものです。当然、それには他のものよりも多くの訓練がいるはずで、ところが、奇妙なことに、私たちはこの目的のために特別の講義や訓練を受けたことはありません。小中学校では、家族のこと、夏休みのこと、

遠足や特別の行事のことなどの作文を書かされはしましたが、それ以来、文章を書くことに
ついては、だれも何も教わってこなかったと思います。

書くためには訓練が必要 国際学会などでは、日本人の発表はわかりにくい、論文の文章
がへただ、といわれることがあります。米国で発行しているある総合雑誌が、「よい」文章
を書く日本人ライターを探すのに苦労したという話を聞いたこともあります。候補者となっ
た著名な日本人の文章を読んでもみると、どの人のものも、要点が明確でなく、論理が堂々め
ぐりをしているものばかりだったということです。

これは、日本人が外国語で発表したためや、英語で文章を書いたために生じたことではな
かったと思います。ましてや、日本人の能力に問題があったためでもなかったでしょう。わ
かりにくいとか、「堂々めぐり」という批判の出る源には、私たちが文章を使って効果的に
伝達をはかる術すべを学んでこなかったという技術の問題があったのだらうと思います。

文章を書くには、きれいな文字や正しい漢字を書くことは違った能力が必要です。それ
には、作文を書かされたときのように、ただ文の連続を書くような訓練をしただけでは不十
分です。文章を書くためには、思想（書きたいこと）を言語で表現する訓練がいります。言
い換えれば、「筋道」が通り、形式の整った話の書ける能力を養う勉強を、自然まかせにで

はなく、どこかで意識的に行う必要があるのです。

Ⅰ 味の文章と論理の文章

文章のよしあしを表す言葉には、「うまい」とか「へた」、「よい」とか「悪い」とかが使われます。では、具体的に、どんな文章を「うまい」文章（あるいは名文）というのでしょうか。どんな文章が「よい」文章なのでしょうか。

結論から先にいってしまうと、名文やよい文章を定義するのは困難なことのようには思いません。ほとんど不可能に近いものでしょう。文章のよしあしは、結局のところ、その道の大家がいうように、「読者自身が感覚を以て感じ分けるより外に、他から教えようはない」ものだと思われま（谷崎潤一郎『文章読本』）。

◆「うまい」文章

「うまい」文章には「味」があります。名状しがたい味が読者の共感を呼び、読者に感動を与えます。味のあるなしが名文と駄文を分けるといってもよいと思います。名文は、文章

の味が多くの人の中にしみこんだときに生まれるものです。

その一方で、どんな文章でも、それを読んで個人的に共感と感動を覚えるならば、その読者にとってはそれが名文となります。三島由紀夫『文章読本』は、「人を陶醉させる文章とはどんなものか」という問に、「自分を酔わせてくれない文章が、人を酔わせることも十分あります。ただ、文章にはアルコールのように万人を酔わせる共通の要素がないだけであります」と答えています。

名文 私 は、たとえば、長塚節の『土』の次の文章に感動します。私はこれをうまい文章であり、名文だと思っています。

◇秋だ。

孰^{いず}れの梢^{こずえ}も繁茂する力がその極度に達して其処^{ちようらく}に凋落^{おちかけ}の俤^{おもかげ}が微かに浮んだ。毎日透徹した空をじりじりと軋^きりながら高熱を放射しつつあった日も余りに長い昼の時間に倦^うもうとして、空からそうして地上の凡てが漸く変調を呈した。心もとない雲が簇々^{むらむら}と南から駆け走って、その度毎に驟雨^{しゅうう}をざあと斜に注ぐ。(長塚節『土』新潮文庫版)

この文章には、関東北部の夏の終りの空模様を写しだしてみことなものがあります。うまい文章はイメージが湧くといわれますが、それもうなずけます。『土』は貧しい農民生活を描いて、ジョン・スタインベックの『怒りの葡萄』や、パール・バックの『大地』と肩を並べる作品といえるだろうと思います。

私は、また、アメリカの黒人市民権運動を指導し、後にノーベル平和賞をとったマーチン・ルーサー・キング牧師の次のパラグラフ（段落）を含む演説文にも、読むたびに新たな感動を覚えます。

◇..., I still have a dream. It is a dream deeply rooted in the American dream that one day this nation will rise up and live out the true meaning of its creed — we hold these truths to be self-evident, that all men are created equal.

I have a dream that one day on the red hills of Georgia, sons of former slaves and sons of former slave-owners will be able to sit down together at the table of brotherhood.

I have a dream that one day even the state of Mississippi, a state sweltering with the heat of injustice, sweltering with the heat of oppression, will be transformed into an oasis